動詞句内要素の等位接続について

椙　本　顕　士・中　村　太　一

1. 導入

一般に、等位接続される要素は同じ統語的特徴（範疇、機能等）を持つものに限られるとされ、これを Law of Coordination of Likes（LCL）と呼ぶ（Williams（1981）他）。（1a）が LCL の違反例であり、動詞句内の目的語と付加詞が等位接続されると非文法的である。

(1)　a.* John eats pork and at home.
　　b.　John eats only pork and only at home.

(Grosu (1985: 231–232))

しかし LCL の反例も存在し、（1b）では目的語と付加詞をそれぞれ only で修飾した上で等位接続すると容認可能となる。本稿では、（1b）で示すような異なる文法範疇・機能を持つ動詞句内要素が等位接続されている、以下 Heterofunctional Coordinate Construction（HCC）と呼ぶ構文について、その特徴を考察し、統語的観点から説明を与えることを試みる。

2. HCC の特徴

HCC の一つ目の特徴は、動詞の 2 つの異なる交替形が関与することである。例えば、Grosu（1985）は、動詞 eat は非特定的目的語交替と呼ばれる自他交替を示すが、（1b）では他動詞 eat の目的語（NP）と自動詞 eat の付加詞（PP）が等位接続されていると論じている。

この特徴と関連して、2 つ目に、Grosu（1985）や Whitman（2004）等で指摘されるように、HCC は単一の出来事を表すのではなく、2 つの別々の出来事が生じていると解釈される。このため時の副詞を加えると、容認度が上がる。

(2)　John ate only pork yesterday and only at home today.

HCC の 3 つ目の特徴として、Whitman（2004）で観察されるように、等位項は接続の順序にかかわらず文法的となる。

(3)　John ate only at home today and only pork yesterday.

（3）では等位項の接続の順序が（2）とは逆になっても容認可能であることを示している。

しかし本稿の新発見として、（4）の自他交替を示す心理動詞では等位項間の順序に制限がある。

(4)　a. The student (経験者) worries about his grades (感情の対象).
　　b.　The student (行為者／原因) worries his teacher (経験者).

(5)　The student worries only his teacher before exams and only about his grades after the semester is over.

(6) * The student worries only about his grade after the semester is over and only his teacher before exams.

（5, 6）で示すように、他動詞 worry の目的語を第一等位項にし、自動詞 worry の about 句を第二等位項にすると容認されるが、目的語と about 句を逆にして等位接続すると容認されない。

3. 提案と分析

本稿では、上記の特徴を示す HCC は、動詞句内要素が直接等位接続されているのではなく、それを含む動詞句同士が等位接続され、第二等位項の動詞句が省略されていると提案する。ここで動詞句同士の等位接続と分析するのは、2 つの動詞句が存在することによって、この構文の特徴である、2 つの異なる交替形の意味が生じる事実を捉えられるためである。また削除分析をとるのは、Nakamura and Sugimoto (2015: 70–71)によると、動詞句削除にも（5）と（6）に見られたのと同様の先行詞・削除部の関係（7）が観察されるためである。

(7)　a.　Susan said that Mary's poor health$_i$ would worry John$_j$ and he$_j$ did <worry about it$_i$>.
　　b. * Susan believed that John$_i$ worried about Mary's poor health$_j$, but it$_j$ did not <worry him$_i$>.

先行文と削除文の動詞の自他に注目すると、他動詞先行文を基にして自動詞文に動詞句削除を適用可能であるが、逆は成り立たない。彼らはこの事実に対して、他動詞の構造は自動詞の構造をその一部として含む構造であると仮定し、動詞句構造の大きさの観点から、自動詞文の動詞句削除は他動詞文から復元できるため容認されるが、逆の場合は復元できないため容認されないと説明する。本稿では、上記の類似に着目し、この説明方法を（5, 6）にも援用する。またこの際、動詞 worry と

eat に対してそれぞれ（8）と（9）を動詞句の構造として仮定する。（Alexiadou, Anagnostopoulou and Schäfer (2015)他）。

(8) a. [$_{v\mathrm{P}}$ DP1 $v_{\text{experiencer}}$ [$_{v\mathrm{P}}$ *about*P $v_{\text{subject matter}}$ [$_{\sqrt{\mathrm{P}}}$ √worry]]](=(4a))
b. [$_{\mathrm{VoiceP}}$ DP1 Voice [$_{v\mathrm{P}}$ DP2 $v_{\text{experiencer}}$ [$_{v\mathrm{P}}$ $\varnothing_{\mathrm{SM}}$ $v_{\text{subject matter}}$ [$_{\sqrt{\mathrm{P}}}$ √worry]]]](=(4b))

(9) a. [$_{\mathrm{VoiceP}}$ DP1 Voice [$_{v\mathrm{P}}$ $\varnothing_{\mathrm{TH}}$ v_{theme} [$_{\sqrt{\mathrm{P}}}$ √eat]]]
b. [$_{\mathrm{VoiceP}}$ DP1 Voice [$_{v\mathrm{P}}$ DP2 v_{theme} [$_{\sqrt{\mathrm{P}}}$ √eat]]]

なお、非顕在的項∅は、不定の表現（（9a）では something edible）として解釈されるものとし、また at home のような付加詞と時を表す表現は、動詞句の最上位の投射に付加すると仮定する（今西・浅野（1990: 321–324））。さらに only によって焦点化される名詞句は、削除が適用される場合には、動詞句の最上位の投射に移動するものとする（cf. Gengel（2013））。また動詞句の削除は、意味的な同一性に加え、先行詞が削除部と同一の機能投射を持つ構造をその部分集合とする場合に適用されるとする統語的同一性条件を仮定する（cf. Merchant (2001)、Merchant（2013）他）。

これら仮定に基づくと、（2, 3）の eat の動詞句部分の構造は、（10a, b）で示すように、同一の機能範疇からなる VoiceP 同士が等位接続されるため、第二等位項内で動詞句の外側に移動、または付加した要素を残して削除が可能となる。また、*v* 主要部がイベント項（Parsons（1990））を導入すると考えると、2 つの別々の出来事と解釈されるという上記の 2 つ目の特徴も説明することができる。

(10) a. [$_{\&\mathrm{P}}$[$_{\mathrm{VoiceP}}$**[$_{\mathrm{VoiceP}}$ t_{AG} Voice only DP$_{\mathrm{TH}}$ *v* √eat]** 時の副詞句]
and [$_{\mathrm{VoiceP}}$[$_{\mathrm{VoiceP}}$~~**[$_{\mathrm{VoiceP}}$ t_{AG} Voice ∅$_{\mathrm{TH}}$ *v* √eat]**~~ only at home] 時の副詞句]]
b. [$_{\&\mathrm{P}}$[$_{\mathrm{VoiceP}}$[$_{\mathrm{VoiceP}}$**[$_{\mathrm{VoiceP}}$ t_{AG} Voice ∅$_{\mathrm{TH}}$ *v* √eat]** only at home] 時の副詞句]
and [$_{\mathrm{VoiceP}}$[$_{\mathrm{VoiceP}}$~~**[$_{\mathrm{VoiceP}}$ t_{AG} Voice t_{TH} *v* √eat]**~~ only DP$_{\mathrm{TH}}$] 時の副詞句]]

（5, 6）の worry については、VoiceP と *v*P が等位接続される。（5）のように経験者項が第一等位項であり主題項が第二等位項の場合、（11a）で示すように第一等位項の VoiceP 内の *v*P を先行詞にして第二等位項の *v*P を省略可能である。一方、（6）のように逆の語順の場合、（11b）で示すように *v*P を先行詞として VoiceP を省略することになるが、統語的同一性条件に違反する。

(11) a. [$_{\&\mathrm{P}}$[$_{\mathrm{VoiceP}}$[$_{\mathrm{VoiceP}}$ t_{AG} [$_{\mathrm{Voice'}}$ Voice **[$_{v\mathrm{P}}$ only DP$_{\mathrm{EXP}}$ *v* ∅$_{\mathrm{SM}}$ *v* √worry]**]] 時の副詞句]
and [$_{v\mathrm{P}}$[$_{v\mathrm{P}}$~~**[$_{v\mathrm{P}}$ t_{EXP} *v* t_{SM} *v* √worry]**~~ only DP$_{\mathrm{SM}}$] 時の副詞句]]
b. * [$_{\&\mathrm{P}}$[$_{v\mathrm{P}}$**[$_{v\mathrm{P}}$ t_{EXP} *v* only DP$_{\mathrm{SM}}$ *v* √worry]** 時の副詞句]
and [$_{\mathrm{VoiceP}}$[$_{\mathrm{VoiceP}}$~~**[$_{\mathrm{VoiceP}}$ t_{AG} Voice t_{EXP} *v* ∅$_{\mathrm{SM}}$ *v* √worry]**~~ only DP$_{\mathrm{EXP}}$] 時の副詞句]]

4. 結論

本稿では、異なる文法範疇・機能を持つ動詞句内要素の等位接続には当該要素を含む動詞句の等位接続と省略による派生が可能であると提案し、eat と worry の振る舞いの違いを削除に課せられる復元可能性から説明した。

References

Alexiadou, Artemis, Elena Anagnostopoulou and Florain Schäfer (2015) *External Arguments in Transitivity Alternations: A Layering Approach*, Oxford University Press, Oxford.

Gengel, Kirsten (2013) *Pseudogapping and Ellipsis*, Oxford University Press, Oxford.

Grosu, Alexander (1985) "Subcategorization and parallelism," *Theoretical Linguistics* 12, 231–239.

Merchant, Jason (2001) *The Syntax of Silence: Sluicing, Islands, and the Theory of Ellipsis,* Oxford University Press, Oxford.

Merchant, Jason (2013) "Voice and Ellipsis," *Linguistic Inquiry* 44, 77–108.

Nakamura, Taichi and Kenji Sugimoto (2015) "Argument Structure Alternations and Verb Phrase Ellipsis: Two Case Studies," *Explorations in English Linguistics* 29, 63–83.

Parsons, Terence (1990) *Events in the Semantics of English: A Study in Subatomic Semantics*, MIT Press, Cambridge, MA.

Sugimoto, Kenji (2018) "An Argument Structure Alternation of Change-of-State Verbs under VP-Deletion," *JELS* 35, 145–151.

Whitman, Neal (2004) "Semantics and Pragmatics of English Verbal Dependent Coordination," *Language* 80, 403–434.

Williams, Edwin (1981) "Transformationless Grammar," *Linguistic Inquiry* 12, 247–289.